マングローブヘビ

鮮やかな体色をもつマングローブヘビは、マングローブをはじめとする水辺の高木、低木に生息している。後牙類で、両眼の下あたりに長い毒牙があり、身を守るためには躊躇なく咬みついてくる。咬まれると多少の痛みや不快感はあるが、毒は強くないので重症となることはまずない。

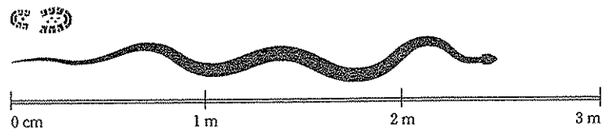
データ

種：マングローブヘビ
Boiga dendrophila
科：ナミヘビ科
生息場所：多雨林の低地、マングローブ湿地。
繁殖：卵生。4～15個の卵を産む。
採食：爬虫類、鳥類、小型哺乳類。
分布：東南アジア。

おもな特徴

光り輝く鱗と独特の体色のため、ほかのヘビと間違えることはまずない。東南アジア産のヘビでこのヘビと似ているのはマルオアマガサだけだが、こちらは黄色の帯が広く、胴体の断面が三角形で、木にはほとんどのぼらない。

成体の平均全長



スペード型の頭部
頭部はスペード型で幅が広く、細いくびとの境目ははっきりしている。頭頂部にはまったく模様がない。

光沢のある鱗
体鱗は大きく、1枚1枚がはっきりわかり、なめらかで輝きが強い。

威嚇姿勢
干渉されると唇部を突き出し、鮮やかな黄色と黒の鱗を見せる。口を大きく開いて敵を威嚇することもある。

マングローブヘビ
細長い体のおかげで、樹上高くにある細い小枝に巻きつくことができる。派手な斑紋は、木洩れ日のさす森林で身を隠すのに役立つが、毒があることを警告しているとも考えられる。